

高齢者と住宅火災



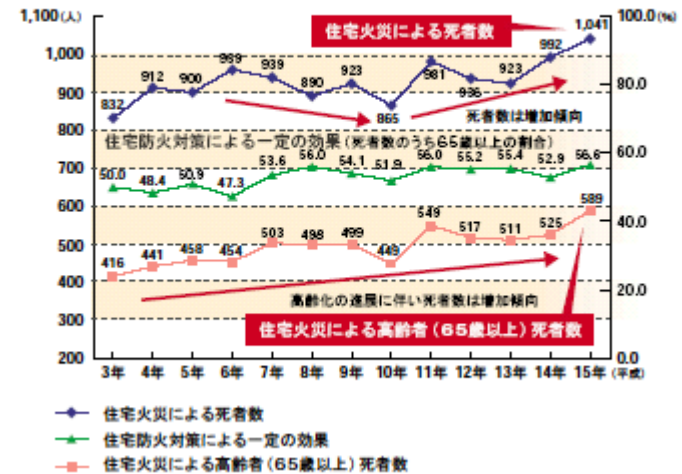
「火は消した？
いつも心に
聞いてみて」

毎年全国で**6万件**の
火災が発生

住宅火災による死者は建物火災の約**9割**、**65歳以上**の
高齢者が過半数を占めています。

高齢者は身体能力が低下し、火災による危険性が増大します。

住宅火災による死者数



【平成16年度 防火ポスター特選】
新上五島町青方小学校6年 前田 卓也

なお、火災や住宅防火について更に詳しくお知りになりたい方は、下記のホームページをご覧ください。

消防庁
<http://www.fdma.go.jp/>

住宅防火対策推進協議会
<http://www.jubo.go.jp>

長崎県危機管理・消防防災課
<http://www.pref.nagasaki.jp/kiki/>

長崎県住宅防火対策推進協議会
(事務局:長崎県危機管理・消防防災課内)
長崎県江戸町2-13

TEL 095-824-3597

高齢者の命が危ない!

住宅火災による死者(放火自殺者等を除く)を世代別に見てみると高齢者になるほど多くの人が亡くなっていることが分かります。高齢者の中には、いざという時の機敏な行動がとりにくく自分の力だけでは避難できない方もいらっしゃいます。高齢者を火災から守るための工夫がぜひ必要となります。



住宅防火いのちを守る7つのポイント

3つの習慣

- 1 寝たばこは、絶対やめる。
- 2 ストープは、燃えやすいものから離れた位置で使用する。
- 3 ガスコンロなどのそばを離れるときは、必ず火を消す。



4つの対策

- 1 逃げ遅れを防ぐために、住宅用火災警報器を設置する。
- 2 寝具や衣類からの火災を防ぐために、防炎製品を使用する。
- 3 火災を小さいうちに消すために、住宅用消火器を備える。
- 4 お年寄りや身体の不自由な人を守るために、隣近所の協力体制をつくる。



高齢者のための住宅防火8つのポイント

- 火の元のまわりはいつも整理整頓をする。
- 火の怖さを再認識。過信は禁物です。
- ストープにあたる時は十分な注意をする。
- ストープや電気コンロは、本来の使用目的以外には使わない。
- 灰皿は縁の広いものを使い、水を入れておく。
- ちょっとした異常もしっかり確認する。
- 灯明には安定したローソク立てを使う。
- 万が一のときは消火より避難を最優先することが大切です。



死者の発生経過・時間帯・出火箇所と住宅用火災警報器等の設置

住宅火災における、高齢者の死者の発生経過の70%は逃げ遅れです。このうち、35%が「病氣・身体不自由」、「熟睡」14%、「延焼拡大が早く」12%、「消火しようとして」10%となっています。時間帯別に見ると、就寝時間帯である22時から6時の間が最も多く、全体の約40%を占めています。

また、出火箇所別で見ると約75%が居室で発生しており、この場合は高齢者の死者が半数以上を占めています。このことは、居室において火災の発生をいち早く感知し、早く逃げるのが住宅火災による死者を減らす有効な手段であることを意味しています。高齢化の進展に伴うこのような住宅火災と高齢者との関係を背景に、平成16年6月2日に住宅用火災警報器等の個人住宅への設置義務化を柱とする、消防法の一部を改正する法律が公布されました。これにより、新規住宅は平成18年6月1日から、既存住宅については、概ね平成21年6月1日を目途に住宅用火災警報器の設置が義務付けられることとなり、死者発生の低減効果が期待されています。